様式 C-19

科学研究費補助金成果報告書

平成 21 年 6 月 1 日現在

研究種目：若手研究（B）
研究期間：2006～2008
課題番号：18700502
研究課題名（和文）　近代ドイツにおけるサッカークラブの形成過程に関する研究

研究課題名（英文）　A study on the formation process of soccer club in modern Germany

研究代表者 釜崎　太（KAMASAKI FUTOSHI）
弘前大学・教育学部・准教授
研究者番号：00366808

研究成果の概要：本研究では、ブラウンシュヴァイク地方マルチノ・カタリニウム高校（ギムナジウム）の遊戯運動（遊戯を広めるためのムーブメント）にひとつの焦点をあて、1870 年代から世紀転換期までのドイツにおけるサッカークラブの形成過程について検討した。その結果、サッカークラブの形成過程には、①19 世紀初頭に形成された体操クラブにサッカーが位置づけられる過程、②学校のサッカークラブが地域の祝祭に取り込まれながら地域クラブとして確立される過程の二つがあったものの、現在の「総合型地域スポーツクラブ」にみられる公共性の全面展開は、世紀転換期以後をまたなければならなかったことを明らかにした。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2006 年度	1,000,000	0	1,000,000
2007 年度	600,000	0	600,000
2008 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総　計	2,600,000	300,000	2,900,000

研究分野：スポーツ科学
科研費の分科・細目：健康・スポーツ科学、スポーツ科学
キーワード：「ドイツ体操―スポーツ」抗争、地域スポーツクラブ、サッカークラブ、コンラート・コッホ、マルチノカタリニウム高校、大衆社会、身体

１．研究開始当初の背景

本研究課題の申請時には「抽象レベル」と「具体レベル」の二つの問題意識があった。抽象レベルでは、スポーツの世界化の過程について再検討する必要性の認識である。スポーツの世界化をめぐっては、近代国家の帝国主義にその要因を認める「文化帝国主義」と、スポーツの普遍的な価値に要因を認める「普遍主義」の見解が対立的に展開されてきた。しかしながら、スポーツが各国に定着する過程には伝統文化の「抵抗」や「融合」といった複雑な過程が存在していた。この過程を近代ドイツにおけるサッカーの定着・普及の過程に着目しながら明らかにしたいと考えたのである。具体レベルでは、今日の「グローバリゼーション」と「ローカリゼーション」を

めぐる国際社会の問題と、日本における「地域スポーツクラブ」の育成に関する問題があった。19 世紀のドイツにおいてはグローバルな文化であるサッカーと、ローカルな文化であるドイツ体操が激しく抗争を繰り返し、その結果、総合型の地域スポーツクラブが形成されるに至っている。したがって、近代ドイツにおけるサッカーの定着過程を分析する研究は、現代の実際的な問題にも何らかの示唆を与えうるものと考えたのである。

２．研究の目的

本研究課題の申請時における研究目的は、ドイツ・ブラウンシュヴァイク地方におけるサッカークラブの形成過程を分析することによって、総合型地域スポーツクラブの発展の要因を探ることであった。19 世紀中頃のドイツにイギリスのサッカーが定着するのは、ブラウンシュヴァイク地方においてである。当時のドイツには体操クラブが存在し、国家主義を中心に形成された体操家たちにとって、サッカーは敵国の文化であり、容易に受けいれることのできない外来文化であった。しかし 19 世紀の後半には、サッカーを中心とした総合型の地域スポーツクラブがドイツ最大のスポーツクラブとして定着・普及する。本研究では如何なる要因がサッカーをドイツに定着させ、スポーツクラブを普及させたのかについて明らかにする。

３．研究の方法

本研究を遂行するにあたって、1870 年代のブラウンシュヴァイクに残されている文献を収集・翻訳し、「ドイツ体操―スポーツ」抗争を中心に分析した。有益な資料を収集するために、補足的に、現地のスポーツクラブ関係者に聞き取り調査を実施した。

2006 年は、(1) 現在までに公表されているドイツ体操に関する文献を広範に収集・分類し、検討を加えた。(2) ドイツのスポーツクラブ関係者にインタビューし、(3) 19 世紀ブラウンシュヴァイク地方のドイツ体操・スポーツクラブに関する文献を収集し、それらの文献をドイツ体操クラブの形成過程を中心に分析した。

2007 年は、19 世紀ブラウンシュヴァイク地方のサッカークラブの形成過程に関する文献を収集・翻訳し、「ドイツ体操―スポーツ」抗争及びスポーツの定着・普及の過程を分析した。特に、ドイツ・サッカーの父と呼ばれるコンラート・コッホの文献と、マルチノ・カタリニウム高校の遊戯運動を中心に検討した。

2008 年は、ドイツのスポーツクラブとサッカークラブに関する文献を収集・分類し、特に世紀転換期を中心に、スポーツの大衆化と公共性の限界について検討した。

４．研究成果

本研究の成果は大きく三つに分けられる。(1)近代ドイツにおける体操クラブの成立過程の解明。(2)近代ドイツにおけるサッカーの伝播とサッカークラブの成立過程の解明。(3)近代ドイツにおけるスポーツの定着・普及の過程の解明である。なかでも、(2)で明らかになったコッホのスポーツ教育論とマルチノ・カタリニウム高校の遊戯運動（サッカークラブの形成）に関する研究は学界において大きなインパクトをもつものであったと言える。以下では、上記三つの区分にもとづきながら、その理由と研究の内容について示す。

(1) 近代ドイツにおける体操クラブの成立過程の解明。これまで日本では、近代ドイツにおける体操クラブの成立過程を、フリードリヒ・ヤーンの体操＝進歩主義的／アドルフ・シュピースの体操＝保守主義的という図式にもとづいて、シュピースの体操が支配的になることによって、ドイツの体操クラブが保守

的な傾向を帯びたことが指摘されてきた。しかしながら、本研究においては、「身体」に及ぼす影響を考えるとき、ヤーンの体操にも、自ら進んで規律を守る「規律・訓練化」の機能があり、その機能のなかで「国家主義」や「位階制」を浸透させていた経緯が明らかとなった。また、19 世紀の近代的・民主的なムーブメントを標榜したドイツ体操には、「平等」（公共性）の貫徹という意味において、大きな限界があったことも指摘した。

(2) 近代ドイツにおけるサッカーの伝播とサッカークラブの成立過程の解明。近代ドイツにおけるサッカークラブの形成過程は、①19 世紀初頭に形成された体操クラブにサッカーが位置づけられる過程、②学校のサッカークラブが地域の祝祭に取り込まれながら地域クラブとして形成される過程の二つがあったが、本研究では後者の場合、特にマルチノ・カタリニウム高校の遊戯運動に着目した。

1860 年代に入ると、ドイツ体操の一面性が批判されるようになり、ドイツ体操を改革しようとする動きが現れる。なかでも、スポーツの受容という意味で注目すべきは、ドイツ体操の「遊戯」を復興させることで、ドイツ体操を大衆運動にまで高める大きな契機となった、いわゆる「遊戯運動」である。マルチノ・カタリニウム高校では、コッホとオウグスト・ヘルマンを中心に、スポーツ（当初「イギリスの遊戯」、1890 年前後に「スポーツ」という表現が用いられる：以下「スポーツ」）を学校教育に導入しようとする遊戯運動が展開される。コッホは、スポーツ教育によってパブリック・スクールを改革したアーノルドの「スポーツ教育」論に感銘を受け、ドイツの荒廃したギムナジウムを改革するためにスポーツの導入を試みた。外国文化としてスポーツが排撃されるなかで、スポーツを導入しようとする彼らの試みは、ヤーンのドイツ体操にみられた「自由な体操の集まり」の遊戯的な活動を復興させようとする取り組みとなって具体化される。その取り組みは「ヤーン・ルネッサンス」と呼ばれた。コッホは、体操家、学校当局、教育庁などにスポーツ教育を公認するよう働きかけるなかで、ドイツ体操の遊戯とスポーツを融合させ（学校遊戯）、その意義を「共同性」の育成に求めた。コッホは、生徒たちが熱心に取り組み、「ルール」や「規範」という制限にもとづいて「協力的なプレー」が展開されるスポーツによって、生徒たちが自主的に「共同性」を身につけるという理論を展開したのである。彼らの取り組みによって、学校遊戯は「自由な体操の集まり」を超えた義務として公認され、放課後におこなわれるサッカークラブが形成されることになる。こうして、彼らは、ルールや規範を自主的に遵守しながら勝利、記録、トレーニングを追求する「従順な身体」の形成、すなわちスポーツによる「自己規律化」という機能を、ドイツの学校体育に萌芽させたのである。

だが、荒廃したギムナジウムの生徒たちを前に、「学校とは何か」「体育とは何か」を問うていたコッホの初期の「学校遊戯」論は、彼が描く「理想的」な「共同性」に生徒たちをしたがわせようとするものではなかった。少なくとも、初期の頃には、学校を「家庭」と「国家」の中間に位置づけ、必修の「授業」ではなく、「自由な体操の集まり」において、教師と生徒、生徒と生徒の自主的な交流のなかでの「共同性」を求めていたのであり、コッホはそこに形成される「共同性」の姿さえ、描き出してはいなかった。つまり、コッホは、「国家」によって方向づけられる「共同性」ではなく、極めて「市民」的な、いわば「下から」の「共同性」の構築を目指していたのである。当時の体操家たちが排外主義的な国家主義に傾倒していた事実を考えるならば、コッホがスポーツの意義を認め、市民的な意味での「共同性」の構築を目指した初期の理論には、国家主義へと傾倒していた中心的な体育組織とは異なる可能性がはらまれていたと言える。さらに、マルチノ・カタリニウムに形成されたサッカークラブは、地域のセダン祭に学校対

抗の競技会として取り入れられ、大きな人気を獲得し、地域の人々に開かれたサッカークラブの生成へと発展していく。しかしながら、コッホはセダン祭と遊戯振興中央委員会（国家的組織）での活動を通して、スポーツを広く大衆化させようとする取り組みのなかで、当時のドイツを支配していた国家主義に傾倒するようになり、世紀転換期には、スポーツによって育まれる理想的な「共同性」を軍国主義的な「国家」に見出すことになる。体操家たちは、コッホらの遊戯運動をイギリス文化の輸入として批判したが、皮肉なことに、コッホらの遊戯運動は、より多くの大衆を取り込むことで、むしろ当時の体操家たちよりも、軍国主義的な国家主義の普及に大きく貢献することになったのである。

以上の本研究の成果には、これまでのドイツ・スポーツ史研究を大きく更新する内容が含まれている。従来までのドイツ・スポーツ史研究では、一方では、ヤーン―シュピース―エドムント・ノイエンドルフというドイツ体操の系譜、他方では、ナチ・オリンピックとして知られる 1936 年のベルリン・オリンピック大会の描写に二分され、「ドイツ体操―スポーツ」抗争に関する「各論的研究は少なく」、「如何にしてイギリスのスポーツモデルがドイツにおいて個別的に受容されたのかという複雑な過程は、歴史的にまだ十分に分析されていない」（ミヒャエル・クリューガー）という現状にあったからである。例えば、遊戯運動に関する研究をみても、その多くは、フェルディナンド・シュミットとエミール・フォン・シェンケンドルフを中心に結成された遊戯振興中央委員会への言及に集中してきた。遊戯振興中央委員会は、皇帝の諮問にもとづいて、上院議員のシェンケンドルフを中心に設立されたという経緯からもうかがわれるように、設立の当初から、国家主義的な性格をもつ組織だったのである。確かに、遊戯振興中央委員会の動向を把握することによって、各地で展開された遊戯運動を如何にして国家が掌握していったのか、その過程を知ることができる。けれども、1891 年に遊戯振興中央委員会が設立される以前から、ドイツ各地では草の根的な遊戯運動が展開されていたのであり、国家とは違うところから出発した遊戯運動の動向を捉えようとするならば、そうした草の根的な遊戯運動の展開を押さえておく必要がある。そうした意味において、コッホとヘルマンを中心に、サッカーがはじめて学校体育に導入された 1870 年代のマルチノ・カタリニウム高校の遊戯運動、なかでもサッカーの導入を積極的に主張したコッホの「学校遊戯」論に焦点をあてた本研究の意義は極めて大きい。

(3) 近代ドイツにおけるスポーツの定着・普及の過程の解明。草の根的な遊戯運動に端を発しながら、ドイツ体操家たちの反対に抗して、スポーツが定着・普及するのは、その主な担い手となる市民階級がドイツ経済の主役となり始める世紀転換期のことである。世紀転換期のドイツ市民を広範なスポーツ参加へと促したのは、草の根的な遊戯運動にみられたような個人的な興味や情熱であった以上に、スポーツに開かれた「金銭とプレステージの獲得の可能性」であった。例えば、フットボールは、勤め人の社会的プレステージと結びついた 1890 年代に、テニスは土地売買が過熱化した 1900 年代に、それぞれ著しい市民階級の参入を招いている。こうしたスポーツと経済の結びつきは、広義の「スポーツ専門職者」を生み出している。1907 年の自転車競技の賞金総額は 110 万マルクに達し、1911 年の展覧会には 24 もの国内製造業者がスポーツ用品を出展し、スポーツ施設専門の建築家が登場している。しかし、スポーツ専門職の形成に何よりも大きな影響を与えたのはメディア市場の拡

大であった。19 世紀後半にはスポーツ専門雑誌の創刊が相次ぎ、大衆読者の獲得をめぐる日刊紙の競争を契機に、スポーツのメディア価値が広く知られるようになり、「スポーツ・ジャーナリスト」と呼ばれる職業分野が確立されたのである。世紀転換期のドイツにおいては、賞品にも大きなプレステージが付与されていた。だが、近代的な経済原理に方向づけられたスポーツは、封建的なシンボルによっても捕捉されていた。この背反的な関係は、スポーツという新しい文化を受容することに必然的に伴ったドイツの困難さに起因するものであった。つまり、サッカー選手が自らを兵士とみなし、勝利を収めたチームが「勲章」によって表彰され、テニスプレーヤーがラケットを「サーベル」に、テニス場を「決闘場」にたとえたように、ドイツに以前から存在した封建的価値がシンボリックに付与されることで、スポーツは体操の国においても受容可能なものとなったのである。伝統的なシンボルがスポーツの受容にとって如何に重要な役割を果たしたかは、人気種目と不人気種目の対称的な参照によって理解される。例えば、戦争遊戯とみなされたサッカーが人気種目となったのに対して、女性的スポーツとみなされたホッケーは不人気種目にとどまった。その大会がサーカスと捉えられ、薄手のユニホームが「下着」とみなされた陸上競技に大衆化のきっかけを与えたのは、50km 超の「完全装備行軍」であった。自転車競技と自動車レースは、伝統的な馬のステイタス・シンボルと結びついたために、素早く受容されている。1905 年、自転車スポーツには、すでに 40,000 人超の愛好者が存在した。ところが、こうした封建的なシンボルは、スポーツの大衆化によって、社会的なインフレーションを引き起こされる。例えば、ユニフォームである。ヴィルヘルムⅡ世は、特定のスポーツクラブに、彼の寵愛を示すユニフォームを授けていた。皇帝自動車クラブ、皇帝ヨットクラブ、皇帝モーターヨットクラブ、皇帝航空クラブなどである。ステイタス・シンボルであったはずの（スポーツにとどまらず、社会一般の）ユニフォームが軽蔑的に「大衆のシンボル」とみなされるようになることに、それらのクラブの大衆化が大きく貢献したのである。皇帝によるスポーツの顕彰は、地方的な王家のレベルでも再生産された。1911 年の陸上競技の年鑑によると、10 の「諸侯と地方的な王家の賞」、11 の「国家の賞」、30 の「都市の賞」、40 の「諸々の賞」が存在した。スポーツ専門職者たちは、賞のリストの第一位に「皇帝の賞」を記載せず、ドイツ陸上競技スポーツ局が寄贈した「万国博覧会の賞」を記載するなど、自らを皇帝直属の貴族と同等の位置においた。いわば、スポーツへの情熱を前に、賞の寄贈者の序列は瑣末なものになっていたのである。このようにして、競争原理を内包するスポーツは、近代ドイツのドイツ体操が 19 世紀のはじめに標榜しながらも、社会化させうることなく潰えてしまった理念を現実のものとしたのである。つまり、イギリスから伝播してきたスポーツは、一方ではドイツ社会の封建的なシンボルをまとい、他方では新しい経済原理に適合しながら受容され、そうした逆説的な特徴をもつスポーツの「大衆化」が、封建的な社会の空洞化を促進させたのである。しかしながら、この「平等」の現実化をもって、スポーツクラブの「公共性」の確立と判断することはできない。なぜなら、当時のスポーツクラブは、国家、地方公共団体などいずれの公的な資金からも補助金を獲得しえていなかったからであり、宣伝の媒体となったのも、皇帝に寵愛されたスポーツクラブか、「スポーツ専門職者」の団体のみだったのである。

本研究による以上の解明によって、これまで経済的な力と結びついたスポーツが社会的な「平等」の促進に貢献してきた経緯が明らかとなった。しかしながら、一方で、今日のドイツの地域スポーツクラブにみられる公共性の確立は、世紀転換期以降をまたなければならず、それゆえ、第一次世界大戦から戦後にかけてまでの過程で、ドイツの地域スポーツクラブがどのようにして公共性を獲得していくのか、その過程の分析が今後の課題として残されたことになる。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）

①釜崎太、世紀転換期（19-20 世紀）のドイツにおける「トゥルネン＝スポーツ」抗争の対立軸としての身体―大衆社会の登場とシンボル―、弘前大学教育学部紀要、査読なし、101 号、2009、 pp.91-107

②釜崎太、コンラート・コッホ:学校遊戯の教育的価値―督学官グラーヴェンホルスト氏の依頼による報告―、現代スポーツ研究、査読なし、第 9 号、2009、pp.73-87

③釜崎太、近代ドイツのトゥルネンにみる「身体」と「権力」、弘前大学教育学部研究紀要、査読なし、第 99 号、2007、pp.87-105

〔学会発表〕（計６件）

①釜崎太、「トゥルネン＝スポーツ」抗争にみる近代ドイツの社会変容―社交的競争と大衆社会―、日本体育・スポーツ哲学会第 30 回記念大会、 2008．9．14、オリンピック青少年センター

②釜崎太、世紀転換期（19～20 世紀）のドイツにおける文化抗争の対立軸―近代オリンピック大会（1896～1916 年）への参加をめぐって―、日本体育学会、2008．9．11、早稲田大学

③釜崎太、世紀転換期（19～20 世紀）のドイツにおける文化抗争の対立軸―近代オリンピック大会（1896～1916 年）への参加をめぐって―、愛知青年会館、2008．9．5、現代スポーツ研究会

④釜崎太、コンラート・コッホの遊戯運動にみる「スポーツ教育」論―「トゥルネン＝スポーツ抗争」の視点から―、 第 58 回日本体育学会、2007．9．5、神戸大学

⑤釜崎太、コンラート・コッホの「学校遊戯」論にみる「個」と「共同体」、第 53 回現代スポーツ研究会、2007．9．1、 新潟会館

⑥釜崎太、マルチノ・カタリニウム・ギムナジウムの遊戯運動―コンラート・コッホ「学校遊戯の教育的価値」を読む―、日本体育学会体育哲学専門分科会、2007．7．14、箱根青雲荘

６．研究組織

(1)研究代表者

釜崎　太（KAMASAKI FUTOSHI）
弘前大学・教育学部・准教授
研究者番号：00366808

(2)研究分担者

(3)連携研究者